

信友

信友会事務局

東京都新宿区四谷本塩町 4-41  
住友生命四谷ビル  
電話 080-4816-3202

データセントリック(中心)の戦い

信友会会長 田中達浩



信友会会員の皆様、通信・システム等の任務に従事されている現職隊員の皆様、つつがなく平成三十一年を迎えられていることとお慶び申し上げます。

平成三十年は世界各地で異常気象が続き、記録的な災害により多くの人命と自然と人工物が奪われました。一過性のものなのか、地球温暖化が確実に進行しているのか、いずれにせよ安全安心な社会を目指す人々に大きな不安を感じさせています。

さて、通信システムの領域では、5G、IoT、AI、ロボットのようない分野が予想以上のスピードで進歩しており、行き着く先が未だ見えない変革の真っ只中のように感じます。これらの技術を駆使した生活・社会基盤は、建物・道路などの物理的なものやプライバシーの保護や倫理観のような人間的なものの発達・陶冶を伴わずに進んでいく予感があります。特に、インターネットで繋がる全てのものが持つデータを使って新たな価値を創るという「ビッグデータ」解析手法によって産み出される「解」は、データの質と量によって、解析のスピードと効率性はもとより「解」の質の高さ・信頼

性に差が出ると考えられます。この差が、経済・通商、技術開発、情報及び政治外交等への優位性、更には戦場における優位性をも変化させようとしています。

このような進化を支える基盤技術が、例えば、半導体集積回路のようなものだとなると、すでに見えない国家間の戦争が始まっていると言えます。一九八〇年代から九十年代にかけて起こったのは「日米半導体戦争」でしたが、今は、中国と日米欧の間において熾烈な争いに入ろうとしています。中国は「二〇二五年までに中国国内で使用する半導体は国内生産で賄う。」ことを目指しています。高品質、かつ、量産化低価格によって生産されたものが中国国内の需要を超えて、「一带一路」の経済圏に普及され、半導体基盤によるデータ圏、すなわち「データの囲い込み」圏ができてしまうと、データ中心の戦いでの勝利が遠ざかって行くように思えます。

一昨年、中国がサイバーセキュリティ法を成立させ中国からのデータの流失を抑えられ、中国国内にある外国の企業・工場・システム等のデータは開示を余儀無くされることになりました。これにより自由なインターネット空間がデータ圏を持つ国家群でグループ化・分断されることとなります。一帯一路圏でインターネットを使用する人口を七億プラス十五億人とし、日米欧圏で七億人とする数字も出ています。

また、装備や製品への組み込み型のチップが、世界中に溢れてくる中国産であることを嫌うのは、バックドアが仕掛けられデータが盗まれること、さらには、サイバー攻撃によって、技術情報を始め、企業情報、個人情報、国家の情報の全てを対象としてデータ搾取が行われるリスクがあるためです。

すでに、データ中心の戦いは始まっています。データの攻防が熾烈になっっているのです。将来を見据え、国家として進化に追隨する努力と先行的に進化を牽引する力が必要とされています。

最後に、本年のラグビーワールドカップと来年の東京オリンピック・パラリンピックがいよいよ開催本番を迎えます。色々な分野で自衛隊の支援が行われると思いますが、隊員の皆様のご活躍と無事の任務達成を心から祈念いたします。また、信友会の活動が全国の会員相互の情報共有や絆のため、お役に立てるよう引き続き努力して参ります。

会員の皆様のご健勝を祈念申し上げます。

陸上自衛隊の指揮通信システム改革

陸上幕僚監部指揮通信システム・情報部長

陸将補 廣 恵次郎



信友会会員の皆様には、平素よりご指導、ご鞭撻を賜り心より感謝申し上げます。平成三十年八月、第二代陸上幕僚監部指揮通信システム・情報部長として着任致しました。前職通信学校長として在職中は多くの信友会の諸先輩方から暖かいご支援を賜り重ねて御礼申し上げます。

さて、新たな職務は陸上自衛隊の将来を左右する極めて重要な役割を担っているとの認識の下、指揮通信システムについては以下を目標に全力を尽くしたいと考えております。

- 一 陸上自衛隊のシステムのインテグレーション
  - 二 陸上自衛隊のネットワークの充実
  - 三 陸上自衛隊のセキュリティの向上
  - 四 陸上自衛隊のシステム、ネットワーク、セキュリティ制御の可視化・自律化
  - 五 陸上自衛隊のサイバー戦能力の向上
  - 六 陸上自衛隊の電磁波戦能力の向上
  - 七 陸上自衛隊の指揮通信システムと情報との融合
  - 八 陸上自衛隊の指揮通信システムを使った業務改革
  - 九 陸上自衛隊と海上自衛隊及び航空自衛隊とのインタオペラビリティの確立
  - 十 陸上自衛隊と米陸軍及び米海兵隊とのインタオペラビリティの向上
  - 十一 陸上自衛隊の3D化
  - 十二 陸上自衛隊のSDE化
  - 十三 陸上自衛隊のAI化
  - 十四 陸上自衛隊のXR化
  - 十五 ICTに係る意識改革
- 右、一項から十項迄は信友会会員の方々には詳しい説

明は不要と察しますので、十一項以降について若干の補足を加えたいと思います。

「陸上自衛隊の3D化」とは、陸上自衛隊が今後領域横断的な戦いを遂行する上において、立体的な視点を持ち、立体的に業務を遂行し、いざとなれば立体的に戦うということ。例えば、陸上自衛官は平面の地図を見慣れていたが、今後は地図も3Dにする必要があると考えています。

「陸上自衛隊のSDE化」のSDE(ソフトウェア・デザイン・エンジニアリング)とは、ソフトウェアが全てを規定するとの意味です。技術が進展し今までハードウェアを使わないと出来なかったことがソフトウェアで出来るようになりました。これからは様々なことをソフトウェアで制御していくようにしたいと考えています。SDE化すると部隊の軽量化が図られ、陸上自衛隊の機動力が向上する効果もあると思っています。

「陸上自衛隊のAI化」のAIは人工知能のことです。陸上自衛隊もそろそろAIを使う必要性に迫られていると認識しています。数年前迄は実用性に懐疑的だった人も、現在ではAIの実用性を認識しているのではないのでしょうか。

「陸上自衛隊のXR化」のXRとは、既に実用化されているバーチャル・リアリティ(VR)やオーグメンティッド・リアリティ(AR)、それらに加えて今後出現が予期される○○・リアリティの総称です。まだまだ発展途上の技術群ですが、陸上自衛隊にとっては将来必ず必要になると信じています。

なお、3D化、SDE化、AI化、XR化は独立したものではなく相互に関連し、更に一項から十項迄をより効率的に発展させるドライビング・フォースになるものです。

最後に最も大事なことが、十五項の「ICTに係る意識改革」です。この項だけ主語がないのは、一項から十四項迄を進めるためには、陸上自衛隊だけでなく関係部署のご理解が必要だからです。

今後とも努力を継続する所存です。信友会会員の皆様におかれましては、引き続きご指導・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

## 将来のシステム通信を担う 人材の育成

通信学校長 陸将補 田浦 尚之



平成三十年八月一日付をもって、第四十代陸上自衛隊通信学校長を拝命しました田浦将補です。信友会会員の皆様には、平素よりご指導、ご鞭撻を賜り心より感謝申し上げます。また、前職陸上幕僚監部指揮通信システム課長在職中は、多くの信友会の諸先輩から暖かいご支援を賜り、重ねてお礼申し上げます。

着任して二ヶ月が経ちますが、「将来の自衛隊のシステム通信を担う人材の育成」を要望事項に掲げ、日々校務運営に邁進しております。今回は要望事項にある「人材育成」について、若干触れさせていただきます。

平成三十一年度末に通信科はシステム通信科（仮称）への名称が変わるとともに、特技体系も現在の信務・電話・搬送・無線からネットワーク・システム・セキュリティ（全て仮称）へと変わります。それに伴い、来年度から全国の通信特技を保有している隊員の特技転換教育を実施していく必要があります。この特技転換教育を円滑に実施するため、陸幕と連携し、各方面隊への巡回説明及び昨年十一月から全国の基幹要員を通信学校に集合させた事前教育を開始しました。

このように通信科職種の体制移行は今の時代に「なるべくしてなった」という実感があります。次期大綱・中期の検討が進んでおりますが、報道ベースによると次期大綱の柱にサイバー・電磁波作戦が盛り込まれる可能性があります。まさに、サイバー・電磁波はシステム通信分野の正面であり、今後の戦いでは、我々通信科職種が第一線部隊になり、通信科隊員全員がその認識を強く意識することが重要であると思います。

以上の認識の下、将来の自衛隊のシステム通信を担う人材育成は如何にあるべきかについて述べたいと思います。

一点目は、「統合運用の指揮・統制の命脈たるシステム

通信を運用できる人材の育成」であります。統合幕僚監部ができて十数年が経ち、運用の一元化についてはかなり定着しつつあります。一方で統合におけるシステム通信については、まだ数多くの問題点をクリアしなければならぬのも事実です。若い幹部にあつては、陸自の運用もさることながら、統合運用を早い段階から身につけ、その中で陸上自衛隊のシステム通信アセットを駆使して統合運用を支えるシステム通信運用を習得することが重要だと感じます。

二点目は、統合運用を基本とした「いつでも、どこでも、大容量の通信を確保するため、柔軟な考えを持った人材の育成」であります。これからは、映像も含めたあらゆるシステムを接続した有機的な戦い方を求められます。そのため、大容量のネットワークに連接され、情報共有及び迅速な指揮官の決心に資する情報を適時に提供しなければなりません。民間の通信インフラも含め、与えられた通信インフラ環境の中で柔軟な発想をもってネットワークを構成し、その通信インフラをどう柔軟に運用するかを考え、実践できる人材が求められると思います。

三点目は、「最新のシステム通信を運用するための技術的視点及び最新の知識を探索する人材の育成」であります。システム通信分野の技術は日進月歩に発展していくため、常に最新の技術をキャッチアップしていく必要があります。ある程度の技術の知識を知っておかないと、与えられた状況の中において最適のシステム通信環境を構成することは不可能です。言い換えれば、システム通信技術の知識なくしてシステム通信運用はできないということです。また、新たなサイバー・電磁波分野については通信科がリードしていく必要があります、この分野の最新の知識は我々が日々勉強して成果を累積・共有し、学校教育へ反映していく必要があります。しっかりと技術及び知識の探究心をもった人材の育成が必要だと感じます。

以上の点を踏まえ、今後も強靱な陸上自衛隊の創造のため、システム通信科の将来のために小官以下、陸上自衛隊通信学校が丸となって将来の自衛隊のシステム通信を担う人材を育成していく努力を惜しまず継続していく所存であります。これからも信友会の皆様におかれましては引き続きご指導・ご鞭撻を宜しくお願い致します。

## 通信団からシステム通信団へ

―新改編を経た新たな体制・部隊を支える

システム通信の現状と課題―

初代システム通信団長

陸将補 菅野 俊夫



一 はじめに  
平成三十年三月二十七日、陸上自衛隊は、大改革の一環として陸上総隊を新編するなど、新たな体制に移行しました。これに伴い、大臣直轄部隊の通信団は、研究本部隷下のシステム開発隊を編合した上で陸上総隊直轄部隊の「システム通信団」として生まれ変わりました。

### 二 新生システム通信団の概要

システム通信団は、従来通信団及びシステム開発隊が担ってきた任務・業務を継承しつつ、陸上総隊及びその全国部隊運用に対するシステム通信支援任務を付与されています。編成上の変化事項としては、先に述べたシステム開発隊の編合に加え、中央野外通信群隷下の第三〇一通信運用中隊を廃止した上で第三〇一指揮所通信中隊を朝霞に新編するとともに、中央基地システム通信隊に朝霞派遣隊及び十条派遣隊、第三〇一映像写真中隊に朝霞派遣隊をそれぞれ新編しました。

陸上総隊の隷下となったシステム通信団には、平素の業務実施から各種事態への対処に加え、中央から第一線部隊にわたるシームレスなシステム通信基盤の確保、そして、陸自の情報システムに係る総合的な態勢をもつての一体的な運用支援の実施が求められています。具体的には、システム通信に係る実空間及びサイバー空間における各種脅威への対処、統合運用及び共同作戦への対応、陸自の機動展開に伴うシステム通信組織の拡充及び部隊集中への対応、そして、陸上総隊司令部システム通信調整所における方面隊を跨る調整・統制及び統幕、海空自、米軍、関係部外機関等との二元的な調整を実施することになりました。

### 三 陸上総隊直轄部隊としてのシステム通信の実施

陸上総隊の直轄部隊となったことを踏まえ、第一線部隊運用との関係性を常に意識し、運用に資する任務・業務遂行を旨とすべく、隊員一人一人の意識改革を図っています。そして、従来どおりの陸自及び防衛省・自衛隊共通のシステム通信基盤の管理を担いつつ、陸上総隊司令部のためのシステム通信の確保に加え、指揮システム等による現況把握、テレビ会議等の指揮所活動に対する支援を積極的に実施しています。今後も、各種訓練や実運用の場を通じて陸上総隊司令部、総隊直轄部隊等との連携・支援の要領・態勢を確立・強化して行きます。



総隊隷下になって初めて参加する春季演習場整備（東富士演習場）

一方、陸上総隊司令部、総隊直轄部隊、そして各方面隊を支援するためのシステム通信団の態勢・能力は現時点で十分ではなく、また、各直轄部隊のシステム通信能力についても改善・強化の余地が多いと認識しています。加えて、取り巻く環境の変化を受けて自衛隊の将来態勢／体制が大きく変わることも予想されます。このため、防衛大綱・中期防の策定、特に関連分野の動向を注視しつつ、システム通信団としての自らの将来態勢検討にも着手しています。

### 四 むすび

システム通信団は、変化・進化の極めて速いシステム通信分野・機能を担う実行・実動部隊であり、かつ、他の陸上総隊直轄部隊と同様に職種最大の部隊、唯一無二の部隊です。高い専門性の保持はもとより、先進性、柔軟性と強靱性を兼ね備えた精強な部隊として、陸自の全国運用及び統合運用に最大限寄与し得るよう、システム通信に係る基盤管理、運用支援そして人材育成・管理に全力を尽くして参ります。

## システム装備品の標準化等について

― 将来システム通信の実現に向けて ―

陸上幕僚監部通信電子課長

一等陸佐 奈良岡 信一



信友会の皆様には、陸幕装備計画部通信電子課に對しまして、常日頃から暖かいご支援・ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。また、歴代の通信電子課長をはじめ諸先輩方の築いてこられた業績を引き継ぎ、陸自装備行政の中核としての役割を十分に果たせるよう部下隊員とともに日夜奮闘努力しておりますが、皆様には、引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、自衛隊を取り巻く安全保障環境が、近隣諸国の我が国周辺での活動活発化や異常気象による大規模災害の発生の際など、いつ何が起こることも限らない状況にある中、事態に即応して迅速・着実に任務完遂するためには、各種状況を漏れなく正確に把握して作戦全般の指揮・統制を迅速かつ効果的に実行し得る、優れた情報処理能力を備えたシステムとそれを支える高速・大容量通信が必要不可欠であります。このような認識の下で、平成二十九年九月から検討を開始し、現在事業化を目指している「将来システム通信」の概要について述べたいと思います。

最初は、「システム装備品の標準化」です。現在のシステム装備品は、ストープパイプ型で整備されてきたことにより、それぞれ専用の接続装置によりデータ変換するため接続性に制約があるとともに、半自動又は手動による入出力処理のため、リアルタイムな情報処理や情報共有が困難な状況であり、指揮官の状況判断に資する共通認識図(COP)や火力統制図(FCP)の提供に限界が生じています。そのため、各システム装備品のデータ蓄積・処理基盤(いわゆるサーバ)の共通化及び共通端末を使用した各種業務のアプリケーション化等によるソフトウェアの標準化を目指しています。これにより、あらゆる情報を一元的に表示できるシステムが実現し、指揮官の状況判断に資することができるものと思っています。

ます。

次に、「民間ネットワークの活用」です。現在のネットワークは、固定系通信網では、DII(防衛情報通信基盤)の整備により、大容量のデータ通信が可能ですが、野外交通通信網(衛星通信を除く)では、使用周波数により、データ通信にボトルネックが存在し、高度なデータ処理や迅速な共通認識図の情報共有に限界が生じています。そのため、現行の周波数帯域の(多重)無線回線の伝送効率化に加えて、Xバンド衛星通信、民間高速通信網(LTE回線)を活用した高速・大容量かつ抗たん性ある通信を目指しています。これにより、システムを接続する高速・高効率のネットワークを実現し、必要な情報を必要な時期・場所に伝送できるものと思っています。

最後に、「コストの低減」です。現在はシステム装備品毎に高額な専用端末装置の設置、システム間接続のためのソフトウェア開発及び維持管理に必要な経費により、コストが増大する傾向にあります。今後は、ソフトウェアのみならず、ハードウェアの共通化・効率化によりコストの低減が図れるものと思っています。

以上、概要について述べましたが、これらを実効性あるものとするためには、防衛関連企業との緊密な連携が必須であり、企業の防衛生産・技術に係る基盤の維持・強化が大前提であると認識しています。そのため、必要な予算を確保することは勿論のこと、防衛装備・技術協力の推進にも積極的に参画し、企業の活力向上の一助となれるように努力して参りたいと思います。

結びに、信友会の皆様の今後益々のご健勝とご多幸を祈念申し上げますとともに、通信電子課へのご支援・ご協力を重ねてお願い申し上げます。終わり致します。



衛星通信に関する勉強会(平成30年9月)

## 将来システム通信における補給整備上の課題

補給統制本部通信電子部長

一等陸佐 岡 一博



信友会会員の皆様、信友会創立五十五周年、誠にありがとうございます。また、私も補給統制本部通信電子部の活動並びに通信電子器材の補給整備に対する深いご理解とご厚情を賜り、誠にありがとうございます。

さて、機関紙「信友」への寄稿は一昨年に続き二回目となりますが、今回は「将来の陸自のシステム通信」がテーマということで通信科兵站支援を担任する立場として通信電子器材の補給整備に関し、三つの視点から私見を申し述べさせていただきます。

一つ目の視点は、現在から近い将来、すなわち「二五大綱」に基づく新体制において、南西地域に機動展開する部隊が運用する装備品等の可動率を如何に維持するかという視点です。

島嶼における補給整備は、補給品の追送または故障装備品の後送(海上(航空)輸送を伴うという特性を有しており、これが最大の制約事項となります。輸送のためのアセットには限りがあるため、いつでも補給品の輸送に使用できるというものではありません。このため、必要な整備用部品等は部隊が展開する島嶼に予め事前集積しておくか緊急空輸等の補給手段を確保しておくことが必要です。更に現地において交換整備を行う必要があるため、整備員を各島嶼に常駐させておくか部品と同様の緊急輸送手段を確保しておくことが必須となります。

二つ目の視点は、「新大綱」に基づき、今後新たに整備されていくであろう各種新装備等の補給整備を如何に実現するかというものです。

その対象となるのは、弾道ミサイル攻撃への対処態勢強化のため導入される陸上配備型イージス・システム(イージス・アショア)や宇宙やサイバー空間、電磁波といった新たな領域を横断的に活用(クロス・ドメイン)するための各種システム・装備品等ですが、補給整備上の課題としては、外国製の高度なシステム装備の可動を

維持するための国内整備基盤を如何に確保するか、各種システム装備のサイバー攻撃・電子戦への抗たん性を如何に強化して行くのか、また、被害を受けた場合の復旧を如何に迅速に行うのか、EMP等新たな手段による損耗を如何に局限するか等ではないでしょうか。何れも今後対処すべき重要な課題です。

最後は、将来兵站の態勢強化という視点であり、将来にわたり兵站の実効性を向上するため必要となる事項として最新技術と民間力の活用が重要です。

例えば、AIに代表される最新技術は補給品の需給予測や部品調達の最適化、経費の効率的使用等に活用可能であり、IoTを構成しているICT関連技術は離島における遠隔地整備等に活用できます。また、民間力の活用という観点では、今後前方における補給整備態勢を充実・強化していく上で不足する後方における隊力を補うためにこれまで以上に民間力を積極的に活用していくことが必要であると考えます。

ここまで三つの視点から、将来システム通信の補給整備上の課題について述べましたが、課題解決には先輩方の知見や防衛関連企業の協力が不可欠です。信友会の皆様には今後とも補給統制本部通信電子部へのご協力を賜りますとともに、将来システム通信へのお力添えを賜れば幸いに存じます。

信友会の益々のご隆盛を祈念申し上げます。



通信電子器材の野外整備状況

# 陸上総隊のシステム通信の 現状と課題

陸上総隊司令部運用部システム通信課長

一等陸佐 高橋孝介



平成三十年三月二十七日、統合運用の下、作戦基本部隊（師団・旅団）等の迅速・柔軟な全国運用を可能とするため、陸上総隊が新編されました。

新編に伴い、自衛隊法が改正され、十条の二第三項に「防衛大臣は、第六章に規定する行動その他これに関連する事項に関し陸上自衛隊の部隊の一体的運用を図る必要がある場合には、方面隊の全部又は一部を陸上総隊司令官の指揮下に置くことができる。」と追加されるとともに、これを具体化するため、「陸上自衛隊の部隊の一体的運用の円滑な実施に関する訓令」が制定されました。

これにより、陸上総隊司令官は、「即応態勢、非常勤務態勢の指定」、「駐屯地の警備」、「災害派遣（大規模震災を除く）」等の運用に関する事項は、平素から方面隊を指揮することができ、「防衛出動」、「治安出動」等の六章行動は、大臣からの命令をもって方面隊を指揮することができ権限を有することとなりました。

また、これまで方面隊が各々で実施していた統合幕僚監部、自衛艦隊、航空総隊及び米軍等との間における運用に係る調整は、陸上総隊が一元的に実施することとなり、これらにより迅速かつ円滑な部隊運用及び調整が可能となり、統合運用の実効性が向上します。

陸上総隊は、司令部及び十一個の専門性の高い直轄部隊からなり、これらの一つに新編前まで大臣直轄部隊であった通信団が改編された「システム通信団」も含まれています。

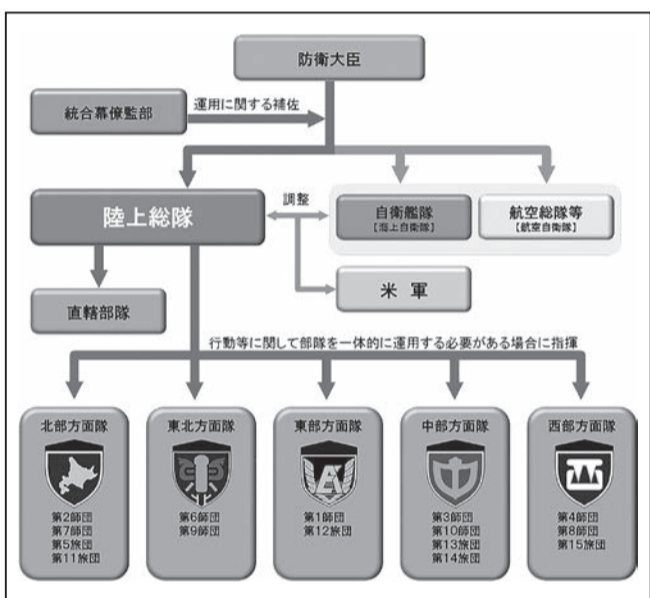
また、司令部は総務部、情報部、運用部、後方運用部、日米共同部、参事官、報道官、医務官、監察官及び法務官からなり、システム通信運用業務、サイバーセキュリティ関連業務等を所掌する「システム通信課」は、運用部に所属しています。なお、司令部主力は朝霞、日米共同部は在日米陸軍が所在する座間にそれぞれ駐屯しています。

陸上総隊のシステム通信運用は、前述した陸上総隊司

令官の方面隊を指揮する権限に基づき、「陸上総隊司令官が行う、作戦基本部隊等の全国運用に際しての指揮・統制・情報の基盤たる全国の通信力・システム通信の資源について、必要な質と量が必要とする方面隊に配分することです。この際、システム通信に関する業務は、「運用」と「措置」の両面を有するという特色を良く理解し、統合幕僚監部、陸上幕僚監部、各方面隊等と密接に連携しつつ、それらをより効果的・効率的に連接させていくことが重要であると認識しています。

平成三十年七月豪雨における災害派遣においては、陸上総隊として、中部方面隊のシステム通信上のニーズに応ずるべく陸上幕僚監部、各方面隊と調整等を行い、映像写真を含む通信力等を配分して適切に対応できたものと認識していますが、一方で、発災当初における通信力等の取得・配分に関する陸上幕僚監部、各方面隊との調整・連携のあり方や、所要の通信速度（容量）や通信手段の確保のための部外通信力の取得等、行政的な措置のための陸上幕僚監部との連携等について、教訓を得たものと考えています。

システム通信に係る要求はますます高度化し、役割も複雑化していく中において、陸上総隊が実施するシステム通信の全国運用は、改善の余地が少なからず存在しますが、今後、各種オペレーション、訓練・演習等を通じて検討を重ね、より実効性あるものに深化させていく所存であります。信友会の皆様におかれましては、引き続きご支援くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。



陸上総隊と方面隊等との相関図

## 西部方面通信群における 体制改革への取組み

前西部方面通信群長（現陸上幕僚監部防衛課開発室長）

一等陸佐 藤田 達也



信友会創立五十五周年、  
誠におめでとうございます。  
また、平素から我々、現役  
通信科隊員へのご支援ご協  
力に對しまして厚くお礼申  
し上げます。

この度、信友会機関紙への投稿の機会を得ましたので、体制改革を中心に西部方面通信群の取組み等について紹介したいと思います。

私が西部方面通信群長を拝命したのは平成二十八年七月であり、平成二十七年度末に導入された野外通信システムの戦力化（及び同戦力化を含む方面隊システム通信組織構成能力の向上）、平成二十九年年度末に新編された水陸機動団通信中隊の編成担任官としての各種準備・練成、平成三十年年度末に新編予定の方面システム防護隊（仮称）の新編準備、南西地域における駐屯地開設に伴う派遣隊新編等各種体制改革業務が目白押しの状態でした。それぞれの体制改革及び取り組み状況等について述べたいと思います。

まず、野外出通信システムの戦力化（及び同戦力化を含む）と、野外出通信システムの通信組織構成能力の向上についてです。

西部方面隊では西通群よりも前に第八通信大隊に野外通信システムが導入されていました。このため、西通群に、器材導入される以前から操作要領や訓練要領等を掌握し、器材導入後の速やかな戦力化に備えました。熊本地震のため、当初の練成計画からやや遅れが生じたものの、隊員の努力によってその遅れを取り戻し、平成二十八年年度方面隊実動演習においては実距離に展開しての通信確保任務を遂行する等、平成二十八年度中に群の戦力化を概成するとともに、一年遅れで導入された方面直轄部隊等への普及を進め戦力化を完整したところです。南西島嶼部の作戦では、各島嶼守備部隊の他、地対艦ミサイル部隊、高射特科部隊、後方支援部隊等が展開することが予想されます。これらの中には自隊通信力が限られた部隊もあり、また、地対艦ミサイル部隊や高射特科部隊が実力を発揮するには、島嶼を跨いだシステムの連接が必須となります。このため、システム通信計画の作成や不測事態における復旧の優先順位の確定



水陸機動団通信中隊壮行会の様子

西部方面通信群としては、各種体制改革業務を推進しつつ、西部方面隊の指揮の命脈であるシステム通信を担う部隊として高い練度を保持するため引き続き練成に励む所存でありますので、信友会の皆様方におかれましては引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

にいたり、方面隊全体の所要を見据え細部までを掌握して検討することが必要です。西通群としてはこの実現のため、「二レベル下の掌握」を合言葉に島嶼作戦におけるシステム通信確保に必要な指揮幕僚活動能力等を鍛えているところです。

続いて、水陸機動団通信中隊の新編準備についてです。水陸機動団は皆様もご承知のとおり、万が一島嶼を占拠された場合、速やかに上陸・奪回・確保するための本格的な水陸両用作戦を行うことを主な任務とする陸自初の本格的な水陸両用作戦部隊です。その作戦遂行にあたり長距離に離隔した離島と艦艇との間の通信確保、統合火力発揮のための海空自衛隊との間の通信確保等、解決すべきシステム通信上の課題が存在しました。この解決のため、統幕、陸幕、方面総監部をはじめ、関係企業の皆様にもご協力いただき、数次の検証と訓練を行い、理想形とまでは言えないものの、作戦遂行上必須のシステム通信を確保できるようになったものと認識しております。なお、通信確保のベースとなる野外通信システムがIP化されており、各種衛星通信器材や民生器材との親和性が高く、様々な組み合わせで使用できることが大きな利点と考えています。

(仮称) に関しては、他方面隊に先  
るため、新編の成否は西方のみで  
ム防護の成否を左右するとの意識  
システム防護隊をはじめとする関  
係部署の協力を得つつ、人材育  
成や各種訓練に励んでいるところ  
です。また、南西地域に新設  
される駐分屯地に新編される派  
遣隊等については、平成二十七  
年度末の与那国派遣隊新編の経  
験と教訓を活かしつつ、各種準  
備を進めております。

## 機動師団化改編に伴う 第八通信大隊の取り組みについて

前第八通信大隊長（現陸上幕僚監部装備計画課勤務）

二等陸佐 大谷 伸秀



信友会の皆様、あけましておめでとうございます。  
我々、第八通信大隊は、平成三十年三月二十七日付の機動師団化改編に伴う対電子小隊の廃止等により、機能的かつコンパクトな通信大隊へと改編いたしました。今回、我々の改編に伴う取り組み等についてご紹介させていただきます。

まず、機動師団たる第八師団は、第四十二即応機動連隊による即応展開、師団主力による一次及び二次展開により、島嶼侵攻に迅速に対処するという任務を有しております。

その機動師団の指揮の命脈であるシステム通信確保のため、第八通信大隊は、通常の通信確保に加え、①迅速な即応展開に追随する即応性、②逐次かつ長距離にわたる機動展開間の継続性、③島嶼への機動展開後の強靱性という三つの特性を兼ね備えなければなりません。そのための取り組みの細部は次のとおりです。

一 師団主力と大きく離隔する即応展開部隊との間の通信確保のため、真つ先に展開する即応展開中隊に出遅れることなく通信大隊の衛星通信班を出動させる即応性が必要であり、即動訓練等により練度を維持しております。

二 各展開部隊の空中・海上機動間の通信を確保するため、装備品のみでは確保困難な時期・場所については、民間を含めたあらゆる手段を使用して通信を継続させることが必要であり、かつ、作戦上の要求に基づく優先度の高い通信の確保に資源を集中するよう取り組みます。この際、海上機動間は、新装備の衛星通信移動局装置が活用できるのではないかと考えております。



師団武道競技会

三 優勢な敵の艦砲・航空火力、電子戦、サイバー戦等から生き残って通信を確保するため、強靱性の発揮が必要であり、偽装・欺騙・分散・築城・警戒、適切な電波管制、回線の有線化等について各種演練の場で練度を維持・向上させております。

これらの取り組みは、現在進行形であり、試行錯誤しておりますが、「すぐに現場で実践し、そこから成果を得て、更に前進する。」という第一線部隊の強みを活かし、貴重かつ有意義な日々を送っております。

結びに、我々、第八通信大隊は、先輩方が築かれたすばらしい伝統を継承するとともに、全国初の機動師団の通信大隊としての自覚と誇りを胸に、「即動必通」の信念をもってあらゆる任務を完遂していく所存であります。

## 新改編を経た新たな体制を支える システム通信の現状と課題

第十四通信隊長

二等陸佐 田中 宗太郎



信友会の皆様、平素からお世話になり本当に有難うございます。  
四国に所在する第十四旅団は、平成三十年三月末に全国の陸自に先駆けて、統合機動防衛力の一翼を担うべく機動旅団へと改編されました。

第十四旅団は改編に伴い、新たに「即応機動する陸上防衛力」の実現のための中核を担い、島嶼部に対する各種事態等にも即応することになりました。このため、第十五普通科連隊を母体とし、平素から高い専門性を有する諸職種がパッケージ化され、航空機等による輸送に適した十六式機動戦闘車（M CV）を装備する等の第十五即応機動連隊が新編等され、旅団として即応性・機動性が一層向上しています。

機動旅団化に伴い、平成二十八年度末に防衛省のXバンド衛星等を使用した高速大容量の衛星回線を構成できる衛星幹線通信システム可搬局装置の導入を皮切りに、二十九年度末には派生型である同移動局装置が全国に先駆け導入されています。これらは新たな任務における貴重な飛び道具となっています。

また、即応機動連隊には、指揮連絡用として移動間衛星通信を行うことのできる車載型衛星通信器材が複数導入されるとともに師団等指揮システムサーバのいわば小型版である機動作戦支援装置がレンタル品として導入され、連隊の島嶼部での作戦基盤が強化されています。

多くの新器材の導入により、システム通信能力が大幅に向上していますが、第十四通信隊の勢力は以前とほぼ同じであるため、今まで以上に器材操作に習熟するとともに保有特技以外の能力向上が必要不可欠です。このため、交差訓練を継続的に実施するとともに旅団各隷下部隊の通信能力の底上げを図るべく着手しています。

第十四通信隊としてはこれらを踏まえ、隊員の意識を高めつつ、あらゆる事態に迅速・的確に対応し、持続力を発揮して必ず任務を完遂し得る強靱な部隊を目指して日々訓練に励んでいます。

一方、平成三十年七月豪雨に係る災害派遣では、各種通信力を活用することにより、活動のための通信基盤を構成することができました。

ご協力頂きました関係者の皆様に深く御礼申し上げますとともに、信友会の皆様には今後ともご支援賜りたくお願い申し上げます。

## 水陸両用作戦システム通信の課題と挑戦

水陸機動団通信中隊長

三等陸佐 鹿毛 満



平成三十年三月二十七日、水陸機動団及び同通信中隊は長崎県佐世保市相浦駐屯地に新編されました。ご尽力いただきました多くの皆様へ心より感謝申し上げます。

水陸機動団通信中隊は、水陸両用作戦に任ずる通信科部隊として、全国から選抜された士気旺盛かつ高い戦技能力を有する隊員を多数擁しており、日々厳しい訓練を通じて隊員間の団結を強めています。

服務状況として、新たな土地への異動、長期間の艦上勤務や慣れない海上機動により、一時は体調不良を訴える隊員もおり、ご家族を含めて不安定な時期もありましたが、体験カウンセリングや家族コミュニティなどの施策も活用して次第に安定してまいりました。

部隊訓練においては、海上自衛隊や団隷下各部隊と連携して練成訓練に励んでおり、小部隊の行動や隊員の基礎動作については十分な練度を確立しており、今後は、新たな分野である水陸両用作戦システム通信への確実な対応と、水陸機動団全体のシステム通信能力の向上へ寄与することが課題であると認識しています。

水陸両用作戦におけるシステム通信上の特性としては、統合運用を前提に日米共同を重視して艦艇・航空機等とのシステム通信を確保する必要があります。また、広大な作戦海域と目標地域の間中海上に通信中継の設定が困難である地形的制約や気象・海象などの影響に加え、常時離隔して移動する艦艇を指揮所とする点で地上作戦のシステム通信とは特性が異なります。さらに、水陸両用作戦において指揮の命脈であるシステム通信は指揮官の命令伝達手段にとどまらず、目標地域内で活動する先遣部隊や海上機動する第一線部隊にとつては、まさに命綱とも言えるべきものであり、細い通信でも維持しなければ隊員の生存を確認することはできません。



機動訓練の状況

これらの特性を踏まえ、課題解決に向けて全国の通信科部隊から送り出された隊員を大切に育て、自隊能力を最高度に高めるとともに、各自衛隊及び各職種部隊等との垣根を越えた検証や訓練を積み重ね、関係部署へ積極的に情報発信して、水陸両用作戦システム通信の戦力化に挑戦していきたいと存じます。引き続き、信友会会員の皆様のご厚いご支援・ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

## 会員だより

### 市ヶ谷台に今日も「君が代」は流れる

会員 岩 本 哲 彌



私は、平成十二年八月に通信団において定年を迎え、再就職した防衛産業で平成十九年十一月に二回目の定年を迎え、札幌に戻りましたが、退官した平成十二年は私の自衛隊の勤務全期間を通じても思い出の多い年でした。

まず、「二〇〇〇年問題」で揺れた平成十二年にかかる年末年始、事態に備えて、待機するも事なきを得、安堵して初日の出を拝みつつ行った団朝礼。市ヶ谷駐屯地業務隊長に代わって実行委員長を仰せつかり、大役を無事果たした三月の観桜会。五月の連休間に行われた防衛本庁大移動に対する全力支援等、本当に思い出の多い年でしたが、中でもこれから述べる出来事は私の記憶に深く刻まれています。

それは、五月の連休前のことでした。課業が終了した途端に「大変だ、大変だ。」の一報が入りました。

課業終了後「君が代」が流れたその直後に駐屯地当直司令室がある建物の電源が落とされてしまったのです。

その建物はずっと残される計画になっていたのですが、当時の官房長であった守屋氏の視察時に直訴があり、その建物は撤去されることになりました。

その撤去を請け負った会社が、契約に基づき、電源を切ってしまったのです。

当直司令室の中には、駐屯地の放送設備が設置されていたので、駐屯地全域に対する放送が出来なくなっていました。

先ず困ったのは、「号音」の放送です。

起床ラッパや消灯ラッパなどとはかくとして、朝夕の「君が代」が市ヶ谷駐屯地に流れないなどということは、由々しき事態です。

当時既に駐屯地司令業務は中央業務支援隊に移っており、その対応を確認したところ、松町ではそんなものは流していなかったと言って真剣に取り合っではくれませんでした。

次の日の土曜日、更に日曜日にも電話を入れてみましたが、号音は流されていませんでした。

団本部の主力は当時、富士演習場で中野群の訓練指導のため不在で、留守番隊長の私は、放つてもおけず出勤して現場に行ってみました。

まず、号音発生装置の取説を些細に読むと、本体にモニター用のスピーカーが付いていることが分かりました。当時、新しく建設されたB棟の地下の交換所には駐屯地放送用の設備が既に稼働していましたので、機器を運び、定時に交換所で操作して何とか市ヶ谷駐屯地に「君が代」を流すことができました。交換所の方は、本来のシステムが整備されるまで本当に大変だったことと思いますが、市ヶ谷台に「君が代」が流れないという事態だけは避けることが出来ました。

なお、余談になりますが、アメリカのペンタゴンでは星条旗は二十四時間揚がり放しだそうです。

### 冬晴れの東京マラソン古希駆ける

会員 竹 下 泰 義



信友会創立五十五周年、誠におめでとございます。

今回は、拙い経験等をお伝えする機会を頂きありがとうございます。

東京マラソンは過去三回（十キロ二回、フル一回）走りましたが、二〇一七東京マラソンはすこぶる膝の調子も良く、楽しく走ることができました。経過は、先頭から十五分遅れで都庁前をスタート（林家たいへいから遅れること十分）。

当初の十キロは七十三分四十秒で日本橋三越を通過。市ヶ谷防衛省前ぐらまでは下り坂で調子がついたようです。

十五キロ地点（浅草雷門）で家族の声援を受け、門前仲町折り返し点に向かいました。治道は応援者で一杯で、応援者がいないのは橋だけの状態で感激でした。

中間点を二時間四十分で通過しました。この頃、腰の曲がった老女とヨボヨボ走る老人を抜きましたが、その体力、気力にビックリです。

蔵前から銀座三十キロ地点になるとペースダウン。品川方面に南下。行き増上寺付近で林家たいへいを抜いたようです。

品川折り返し点を過ぎてからが、痛み、疲労でヘトヘト。脱水症状も出て、四十キロ地点では五時間二十分で通過。

最後の日比谷、大手町付近はハイタッチしながら皇居前ゴールを目指し、五時間四十一分（ネット）完走。ゴールが皇居前に変更になった最初のレースでもあり、感慨ひとしおでした。

さて、マラソンの効能は長寿に繋がると思います。細かく言うと、生活の目標ひいては生き涯が生まれること。また、生活習慣の改善。運動時間を確保し体脂肪を減らし筋肉を増加させる食事の摂取等で達成できます。

更にスポーツ医学の習得。怪我なく段階的な鍛錬をすることにより、長く楽に走れるフォームを保つインナーマッスルと足腰の筋力が強化できます。

そして栄養学の習得。多めの蛋白質、野菜、レース直前は多めの炭水化物。いつ取るかも重要です。例えば夕方の運動後の蛋白質。免疫力もアップ。体温を一日一回は四十度まで上げると有効で、走りとお入浴で達成できます。

その他、血圧降下作用、基礎代謝力向上、内臓脂肪の減少に伴う長寿ホルモン（アディポネクチン）の増加があります。それから社会との交流から精神的ゆとりも生れるかと思えます。

皆様の参考になる所があれば幸いに思います。

### 女性のパワーは無量大？

会員 内 山 恵 子



平成三十年八月八日に、女性自衛官教育隊でともに汗を流した後輩が定年退官を迎え、信友会に入会しました。

後輩の名前は福丸竜子さん、東部方面通信群勤務もあり、ご存知の方も多いと思います。

彼女との出会いは、昭和六十三年九月に新隊員前期教育を担当した時でした。

助教としてマンネリ感を感じ、冷めた態度の私と、陸曹教育を終え、初めての助教に不安を感じながらもキラキラと輝く瞳の福丸さんとは対照的でした。

食事の引率、お風呂の入り方からアイロンのかけ方、靴の磨き方を新隊員に丁寧に教えたり、健康状態を把握したり、悩みやトラブルの対応に明け暮れ、当然眠る時間は短縮されてお肌によくない毎日ですが、いつも笑顔で頑張る彼女の姿に忘れかけていた情熱を呼び起こされる私でした。いつの間にか二人は「丸班長ー!」「竜ちゃん!」と呼び合う仲になりました。

新隊員前期教育を無事に終えて、幹部候補生の指定を受けた私は助教を外れました。

次の年に幹部候補生学校に入校し、幹部に任官した私は女性自衛官教育隊を離れました。その後、教育隊での竜ちゃんの活躍は、風の便りで聞いていましたが、定年退官が目前に迫ってきたところに東部方面通信群本部で勤務する彼女に再会しました。

最後は地元の鹿児島地方協力本部で迎え、壮行会には全国から多くの仲間が駆け付けました。

当日は、仕事を休めず参加できなかった仲間からの花束、祝電は並べられた三つの長机が埋まるほど寄せられ、女性自衛官教育隊勤務者の絆の固さを見ることができました。

職種も年代も様々で、勤務した期間も長い自衛隊人生の中の数年でしかありませんが、営内班で二十四時間共に過ごし、厳しい訓練、様々なトラブルとともに乗り切ったことで一生付き合える関係になるのです。

アラフォー、アラフィフの女性たちが二十代の乙女に戻り、ともに歌って踊りました。

会場の熱気に普通科の屈強な男性陣もタジタジでした。

普段おとなしい女性でも、集団ならば男性顔負けのパワーを発揮します。

女性のパワーは、これからの自衛隊にとって大きな起爆剤になると私は信じています。

## 陸上自衛隊通信電子の現況

### 陸幕通信電子課

#### 一 はじめに

(一) 我が国を取り巻く安全保障環境を概観すると、昨年まで核実験や弾道ミサイル開発を推進してきた北朝鮮は、本年に入り対話の動きを見せているものの、我が国全域を射程に収める弾道ミサイルを実戦配備しており看過できない状況は継続しています。また、中国は、急速な軍事力近代化や運用能力の向上、我が国周辺での行動の活発化等、地域の国際社会の安全保障上の懸念となつていきます。さらに、サイバー空間や宇宙空間といった新たな領域における課題等、グローバルな安全保障上の問題も顕在化してきています。

(二) このようなか、陸上自衛隊は、創隊以来の大改革を推進中であり、平成三十年三月二十七日、陸上幕僚監部及び補給統制本部の改編と併せ、防衛力整備、運用、教育訓練及び兵站到係る中央組織となる陸上総隊、教育訓練研究本部が新編されました。中央組織の新編に加え、「即応機動する陸上防衛力」を体現する機動師団・旅団、水陸機動団が新・改編されるとともに、平成三十年度末には第六師団及び第十一旅団の機動師団・旅団への改編、第四師団の地域配備師団への改編が実施される予定であり、実効性の高い陸上防衛力の構築に努めております。

#### 二 システム通信等に関する状況

(一) 情報通信技術は、その急速な発展と普及に伴い、社会経済活動の基盤として必要不可欠なものとなっており、システムやネットワークに障害が起きた場合、国民生活や経済活動に大きな影響を及ぼす可能性があります。

(二) 特に、サイバーセキュリティに関し、平成二十八年度に政府機関への脅威と認知された件数は七百十一万件に上り、その脅威は年々深刻化し

ており、情報通信システムの安全性向上を図るため、防護システムの整備、規則の整備、人的・技術的基盤の整備、情報共有の推進、最新技術の研究など、総合的な施策を行っています。

また、米国との連携強化のため、米陸軍サイバーC O Eに連絡官を派遣しております。平成三十年度においては、日々高度化・巧妙化するサイバー攻撃に適切に対応するため、自衛隊指揮通信システム隊サイバー防衛隊(共同部隊)が増員されるとともに、西部方面通信群に方面システム防護隊(仮称)が新編される予定です。

#### 三 主要通信電子器材等の整備

平成三十年度は、衛星幹線通信システム可搬局装置を陸上総隊(中央即応連隊)に導入して野外のネットワークインフラを強化し、即応性を向上させます。

また、火力戦闘指揮統制システム及び地上レーダ装置二号を水陸機動団等に導入するとともに、UAV(中域用)を第八師団等に導入し、南西地域のC4ISR能力を向上させます。

#### 四 おわりに

現在、平成三十年度末を目指して検討中である防衛計画の大綱と並行して、次期中期防衛力整備計画(中期防)の検討が行われています。これらの検討においては、サイバー空間や宇宙空間などの新たな領域での活動を見据え、C4ISR能力の強化を推進するとともに、陸上配備型イージス・システム(イージス・アショア)の導入に向けた検討も行われています。

通信電子課は、これらの検討に積極的に取り組むとともに、陸自のC4ISR分野の充実発展に寄与して参る所存です。

信友会会員各位におかれましては、より一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 前年を上回る参加者で 大いに盛り上がる！

### 第五十四回総会及び通信科・ 信友会合同歓送迎会を挙行

第五十四回信友会総会及び通信科・信友会合同歓送迎会が平成三十年二月十八日(日)に「第一ホテル東京(新橋)」において盛大に行われました。

十一時から、陸幕通信電子課長奈良岡一佐の講話に始まり、続いて実施された総会では、平成二十九年度事業報告及び平成三十年度事業計画等が審議・了承されました。総会終了後には、前年度総会以降古希を迎えられた剣持様、竹下様、佐藤様、新井様、末田様五名の会員の方々と田中会長・時津副会長(当時)で記念写真を撮影しました。



万歳三唱

その後、十二時から、信友会会員・現役合同の歓送迎会が挙行されました。歓送迎会当日は、会員・現役をはじめ、関係企業等多くの皆様のご賛同を得て、三百三十七名の出席を頂きました。会員・現役の参加者の合計が前年度に比し二十名の増加で、盛だかつ成功裡



陸幕通信電子課長講話



古希会員記念撮影

に合同歓送迎会を執り行うことができました。

会の進行は、現役発起人代表として通信学校長廣恵将補(当時)の挨拶、退官者(信友会入会者)紹介、田中信友会会長の挨拶及び八十歳以上の参加者十五名の会員の紹介に始まり、会食・懇談の後、最後は通信団長藤井将補(当時)の万歳三唱により締めとなりました。約二時間の会は、和やかな雰囲気の中、信友会会員相互の旧交の場、現役隊員との交流の場、通電関係企業等との意見交換の場として極めて有意義な会となりました。

本年は、二月十日(日)に第一ホテル東京で開催されます。今回も三百名を超える会員及び現役の皆様多数のご来場をお待ちしております。

### 第55回総会・合同歓送迎会のご案内

信友会第五十五回総会及び合同歓送迎会を左記のとおり実施します。

総会では陸幕通信電子課長の講話も予定しております。

年に一度の懇親の場です。大いに懇親の実をあげていただきますようお願い申し上げます。

記

#### 一日時

平成三十一年二月十日(日)

総会 十一時～十一時五十分

合同歓送迎会 十二時～一四時

#### 二 場所

第一ホテル東京(前年に同じ)

新橋駅(JR・銀座線・浅草線)から徒歩五分

住所 東京都港区新橋一―二一六

電話 〇三―三五〇―一四四一一

#### 三 会費

九、〇〇〇円(当日受付にて頂きます。)

#### 【お願い】

出欠については同封のはがきでご返信下さい。

## 事務局だより

### 一 全般

信友会事務局では平成三十年度も会長・副会長の指導のもと、年間五回の役員会を開催し、総会・合同歓送迎会業務を中心に各種管理業務を行ってまいりました。

### 二 地区懇親会の開催

会員相互の親睦を目的とした地区懇親会を各方面通信群等のご支援を戴きながら開催しております。

昨年度は、平成三十年三月に西部方面通信群創立記念行事に併せて開催する予定でしたが、創立記念行事が中止となったため、地区懇親会も中止としました。今年度は、平成三十一年三月に改めて西部方面通信群創立記念行事に併せて開催致します。

### 三 信友会会員増加施策

信友会会員は平成二十八年十二月末現在で総数九百四十六名となり千名を切る状況となりました。これに伴い、昨年度から信友会会員増加施策を推進しており今年度も本施策を継続しております。

具体的内容としては、通信学校入校時の機会を捉えて幹部課程に対する信友会会長による講話の実施、課程教育修了時の優秀学生への表彰等を行っております。

また、信友会ホームページ（以下HPという。）には新入会員一覧表を掲載し、会員に情報を提供しております。

現職通信科部隊指揮官に対しては信友会HP閲覧パスワード（以下PWという。）を通知し、信友会活動状況等をご理解いただけるよう努めております。



三尉候補者課程修了時の表彰

今後信友会活動をより充実させ、通信科幹部が定年退官時に信友会への入会意欲が醸成されるよう努力

して参ります。皆様の近い信友会入会資格者で未だ信友会に入会されていない方をご存知でしたら是非入会をお勧め頂けると幸甚です。

### 四 信友会ホームページ

平成三十年五月に「信友会HPのトップページ」をリニューアル致しました。これによりPWをお持ちでない方でも「信友会からのお知らせ」をクリックして当初のご案内ページを閲覧できるようになりました。また、HP閲覧を未だ登録されていないパソコン・ス

### 事務局からのお願い

信友会入会資格をお持ちの方で、信友会に入会されていない方をご存知でしたら、是非お誘い下さい。

#### ◆会員資格

通信科幹部OB及び通信科に関係があった幹部OB等  
(定年退官時に3等陸尉に特別昇任された方も含みます。)

ホームページのURL  
[http:// 信友会 . jp/](http://信友会.jp/)  
メールアドレス  
[shinyukai@tune.ocn.ne.jp](mailto:shinyukai@tune.ocn.ne.jp)

マホ保有者で、希望される方は、信友会事務局（信友会のメールアドレス）あてに、お申し込み下さい。  
なお、新年からのPWにつきましては同封のご案内をご参照下さい。

### 五 信友会役員紹介（\*印 新任）

〔会長〕 田中達浩

〔副会長〕 成田千春（\*）

〔総務〕 長：酒井郁哉

押川裕二・住谷正仁・中内裕

藤田公德（\*）・千頭正明・大野浩俊

片岡博信・須藤一男（機関紙から転任）

〔機関紙〕 長：花田順一朗

笹木明仁・熊田栄（\*）

〔名簿〕 長：縄義生

島田義文・白井一弘・森田康弘

〔会計〕 長：山中隆義

濱田正徳

〔監事〕 長：梁池雅彦（総務から転任）

後藤高弘（名簿から転任）

### 【編集後記】

信友会は本年、創立五十五周年を迎えました。多くの先輩方の努力と現役隊員の皆様の支えがあればこそと思います。

今回お届けした「信友」には節目の年に相応しく、また、防衛省・自衛隊が新しい大綱・中期防を策定する時期にあることを踏まえ、「新たなシステム通信」、「新改編部隊を支えるシステム通信」を軸に現役の皆さんから寄せていただいた記事を掲載いたしました。加えて、会員の皆さんの元気なご様子を紹介いたしました。ご協力いただきました皆さんには紙面をお借りしてお礼申し上げます。今後とも充実した紙面づくりに励みますのでどうか宜しくご指導、ご協力いただきますようお願い致します。

訃報 謹んでご冥福をお祈り申し上げます  
(H29. 12. 02～H30. 12. 01)

氏 名	逝去年月日	住 所
畠 野 篤 郎	H22年5月	東 京 都
田 山 和 雄	H22.10.30	群 馬 県
廣 嶋 清 彦	H25年8月	不 明
溝 口 久 夫	H25.09.28	不 明
河 村 玲	H28.05.20	神奈川県
宇治山 龍 彦	H28.06.28	福 岡 県
橘 三樹三郎	H28.07.02	東 京 都
鍋 島 喜八郎	H28.07.25	埼 玉 県
金 村 善 光	H28.11.24	香 川 県
本 田 高 治	H28年	東 京 都
小 寺 英 樹	H29.01.30	広 島 県
根 岸 英 明	H29.04.15	北 海 道
船 戸 久馬雄	H29.04.17	埼 玉 県
石 国 一 清	H29.05.04	広 島 県
平 澤 泰 三	H29年5月	宮 城 県
保 泉 清	H29.06.13	東 京 都
家 入 明 夫	H29.06.16	埼 玉 県
江 副 章	H29.07.08	神奈川県
久 保 澄 夫	H29.07.08	東 京 都
岡 本 五 郎	H29.08.10	埼 玉 県
浜 田 栄 一	H29.10.04	神奈川県
中 田 保 男	H29.10.16	埼 玉 県
佐 伯 義 則	H29.12.16	東 京 都
平 山 繁 喜	H29.12.21	神奈川県
渡 邊 嘉 孝	H30.03.27	神奈川県
盛 一 丈 嗣	H30.06.18	東 京 都
志 田 日出彦	H30.10.07	千 葉 県
佐 々 木 勲	H30.10.31	茨 城 県
石 橋 正 人	不 明	神奈川県
中 村 良 平	不 明	不 明

### 平成30年叙勲おめでとうございます

春			
瑞宝双光章	椿	宗義	元東北方面後方支援隊
秋			
瑞宝小綬章	行徳	浩志	元通信団長
瑞宝小綬章	吉田	義輝	元防衛施設庁建設部通信課長
瑞宝小綬章	惣坊	勉	元通信団副団長
瑞宝小綬章	安藤	公友	元幹部学校主任教官
瑞宝双光章	荒	由美子	元システム防護隊
瑞宝双光章	池澤	寿人	元九州補給処
瑞宝双光章	齊	憲康	元北部方面通信群

### 平成 30 年度信友会会計報告

(H30.01.01 ～ H30.12.31)

(単位:円)

収 入		支 出	
前 年 繰 越	1,774,000	慶 弔 費	137,800
終 身 会 費	160,000	郵 送 等 事 務 費	198,599
通 信 等 事 務 費	1,168,000	印 刷 費	539,560
利 子	9	原 稿 料	22,368
第54回総会残金繰入金等	5,051	地 方 交 付	0
		手 数 料 等	61,670
		次 年 度 繰 越	2,147,063
計	3,107,060	計	3,107,060

以上のとおり報告します。  
信友会会計幹事

平成30年12月31日  
山中 隆義  
濱田 正徳

監査の結果、異常ありません。  
信友会監事

平成30年12月31日  
梁池 雅彦  
後藤 高弘

### 信友会新入会員名簿

(H29. 12. 02～H30. 12. 01)

氏 名	最終所属	入会年月日	現住所
西 野 充 伸	補統本部	H30.02.02	新 潟 県
小 林 巧	通信団本部	H30.02.17	東 京 都
大 森 俊 之	幹部学校	H30.03.23	埼 玉 県
上 西 慶 明	実験団本部	H30.03.23	東 京 都
後 藤 徳 明	東北通群	H30.04.15	宮 城 県
出 口 尚 雄	補統本部	H30.05.07	東 京 都
馬 場 清 美	東北補給処	H30.07.09	東 京 都
藤 田 公 徳	通信学校	H30.07.10	神奈川県
河 本 宏 章	補統本部	H30.08.01	神奈川県
寫 末 真	指通シス隊	H30.08.01	千 葉 県
奥 山 盛	東北通群	H30.08.06	宮 城 県
福 丸 竜 子	鹿児島地本	H30.08.08	鹿児島県
菅 原 章 夫	5旅司令部	H30.08.16	北 海 道
俵 坂 誠	西方通群	H30.10.12	熊 本 県
長谷川 信 一	補統本部	H30.10.15	東 京 都
林 武 彦	シ通団本部	H30.10.25	埼 玉 県
池 田 幸 生	補統本部	H30.11.16	東 京 都
渡 辺 辰 悟	通信学校	H30.12.01	神奈川県
式 守 幸 喜	東方通信群	H30.12.01	埼 玉 県



合同歓送迎会新入会員紹介